

第 章 分析と考察

第1節 遺跡数と住居跡数からみた環状列石構築期の社会的様相

現在、青森県内の遺跡数は、旧石器時代から中・近世にかけて、約4,200箇所の遺跡が確認されている。うち、学術調査や増え続ける開発行為に伴う緊急調査などによって、充分な内容を把握できる遺跡はごく一部にしか過ぎない。それでも、近年の詳細な分布調査も充実し、青森県教育委員会により最新の県内遺跡地図も刊行され(青森県教育委員会 1998.)時代や時期を追った遺跡の増減を把握できるようになってしまった。また、青森県内で検出された縄文時代の住居跡も集成され(青森大学考古学研究所編 1998.)これについても、各時代の住居跡の増減を把握することができるようになった。

本項では、環状列石が構築された縄文時代後期における社会とその特色を理解するため、一つの資料として遺跡数と住居跡の増減表を作成し、資料の解釈を試みることとした。資料の作成にあたっては、平成10年度に刊行された青森県遺跡地図(青森県教育委員会 1998)ならびに青森大学考古学研究所研究紀要(青森大学考古学研究所編 1998)の一覧表を基本資料とした。なお、地域的な偏在傾向が認められるため、原則的に行政区画による地域割りを行った。

1. 青森県内の遺跡数

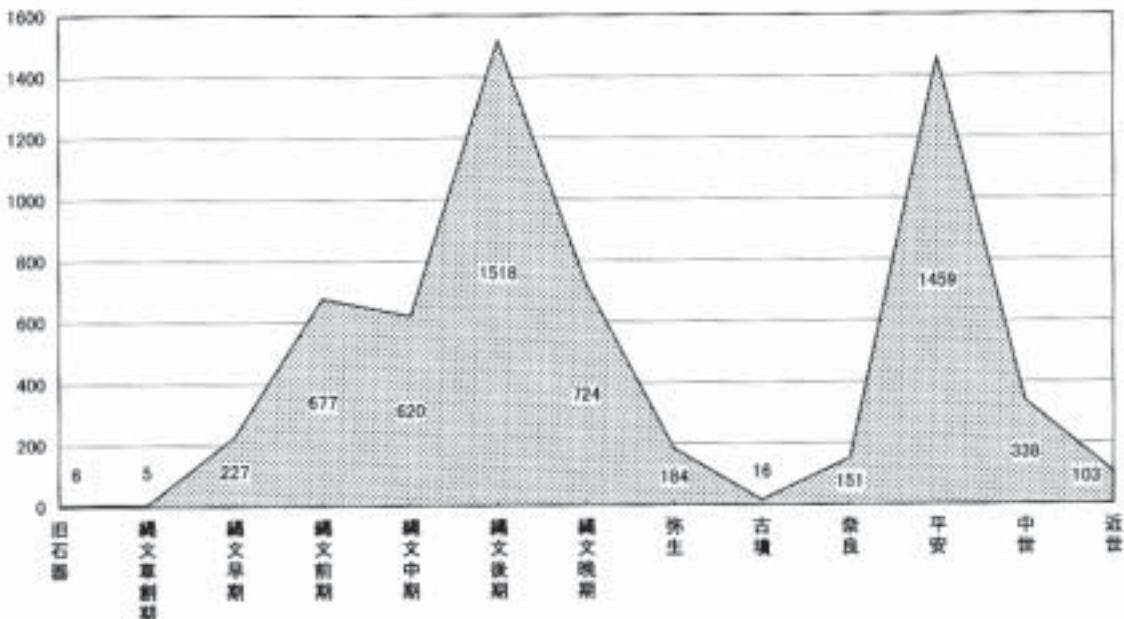
周知の遺跡として登録されているのは平成10年3月31日現在で4,226遺跡である(青森県教育庁文化課1998)。各時期・時代の遺跡数で計上すると、下記のようになる。なお、ここでは時代・時期ごと計上するため、1遺跡で複数の時代・時期に該当する場合は、それらの区切りで分割し、それぞれをカウントした。よって、全体の合計は実際の遺跡数より多くなっている。

旧石器時代	6 遺跡 (0.1%)
縄文時代(草創期～晩期)	4,367 遺跡 (65.0%)
弥生時代	184 遺跡 (2.7%)
古墳時代	16 遺跡 (0.2%)
奈良時代	151 遺跡 (2.2%)
平安時代	1,459 遺跡 (21.7%)
中世	338 遺跡 (5.0%)
近世	103 遺跡 (1.5%)
不明	96 遺跡 (1.4%)

以上のことから、県内の遺跡において、縄文時代が全体の6割以上、次いで平安時代が2割を占めることがわかる。

2. 縄文時代における遺跡数と住居跡数

青森県内における縄文時代の遺跡数については、すでに小山修三・及川昭文氏によって提示されている(小山・及川 1996.)。そこでは、平成4年に刊行された遺跡地図(青森県教育委員会 1992)を基本資料としており、縄文時代の特色を述べるとともに、地域性についても説明している。



第37図 青森県内における遺跡数の推移

縄文時代では4,367遺跡を数え、その内訳は

草創期	5 遺跡 (0.1%)
早期	227 遺跡 (5.2%)
前期	677 遺跡 (15.5%)
中期	620 遺跡 (14.2%)
後期	1,518 遺跡 (34.8%)
晩期	724 遺跡 (16.6%)
不明	596 遺跡 (13.6%)

となり、縄文時代全体で後期が3割以上を占め、それまでの時期に比べると飛躍的に増加していることが理解できる。晩期になると再び遺跡数が減少する(第37図)。地域別にみていくと(第38図~41図)早期では上北郡と三戸郡の太平洋側に集中し、他は、それらの20%にも満たない。前期においては、各地域で全体的に遺跡数が増加する。それでも、早期から維続するかのように、上北郡と三戸郡に集中している。東津軽郡、西津軽郡も比較的多い。中期と後期はほぼ同じ様相を呈し、上北郡と三戸郡に集中しているが、いずれの地域においても、後期が中期を上回っている。晩期になると三戸郡に集中し、他は激減しほぼ均等的な様相を示している。また、前期、後期の2期にピークを持つ地域がほとんどであるが、南津軽郡では後期に1ピーク、北津軽では晩期に向けて増加している。中津軽郡は前期にもピークがある様に見えるが、遺跡の絶対数を考慮に入れ、後期に1ピークの地域とした。

次に、縄文時代各時期における住居跡の軒数をみてみると、

早期	126軒 (8.8%)
前期	249軒 (17.4%)
中期	604軒 (42.2%)
後期	420軒 (29.3%)
晩期	33軒 (2.3%)

となり、住居跡数では中期にピークがあることが分かる。また、前期から中期にかけて急激に増加したものが、後期から晩期にかけて大幅に減少したということもみて取れる。特に後期から晩期にかけての減少率は、約9割と非常に大きいといえる。

地域別にみると(第38図～41図) 早期では遺跡数に比例して上北郡と三戸郡に集中し、下北郡に数軒、他の地域では1軒も確認されていない。前期では、南津軽郡が突出して多く、早期と比べると三戸郡は減少し、他はほぼ同様か増加する様相を示している。中期になると、再び上北郡と三戸郡に集中し、東津軽郡にも多くみられる。後期においても中期とほぼ同じ傾向を示しているが、中期にピークを持つ地域と、後期にピークを持つ地域の二つに大きく分けられる。晩期ではサンプル数が少なく、いずれの地域においても激減する中で、三戸郡が最も多く、次いで南津軽郡、東津軽郡、北津軽郡にみられる。

以上に述べた、縄文時代の遺跡数と住居跡数の増減を関係付けて、地域別にみていく。すると、遺跡数で縄文時代前期、後期の2期にピークを持つ地域では、二つのピークの間に住居跡が増える地域と、ピークにそって住居数が増減する地域の2グループに分類できる。前者には、東津軽郡、上北郡、三戸郡が該当し、前期から後期にかけてピークのある西津軽郡もここに分類できると思われる。さらに、東津軽郡、上北郡、三戸郡においては、増減の傾向だけでなく、遺跡数に対して住居の占める割合においてもほとんど一致している。西津軽郡においては、遺跡数に対して住居跡数が非常に少ない。また、遺跡数のピークに沿って住居跡数も増減する地域には、下北郡が挙げられる。

次に、遺跡数において後期にピークを持つ地域をみてみると、中津軽郡では遺跡数に沿って住居跡も増減するのに対し、南津軽郡では住居跡数が遺跡数のピークに反していることが分かる。

晩期に向けて遺跡数が増加傾向にある北津軽郡は、どちらかといえば遺跡数に沿って住居跡数も増減する地域であるといえる。

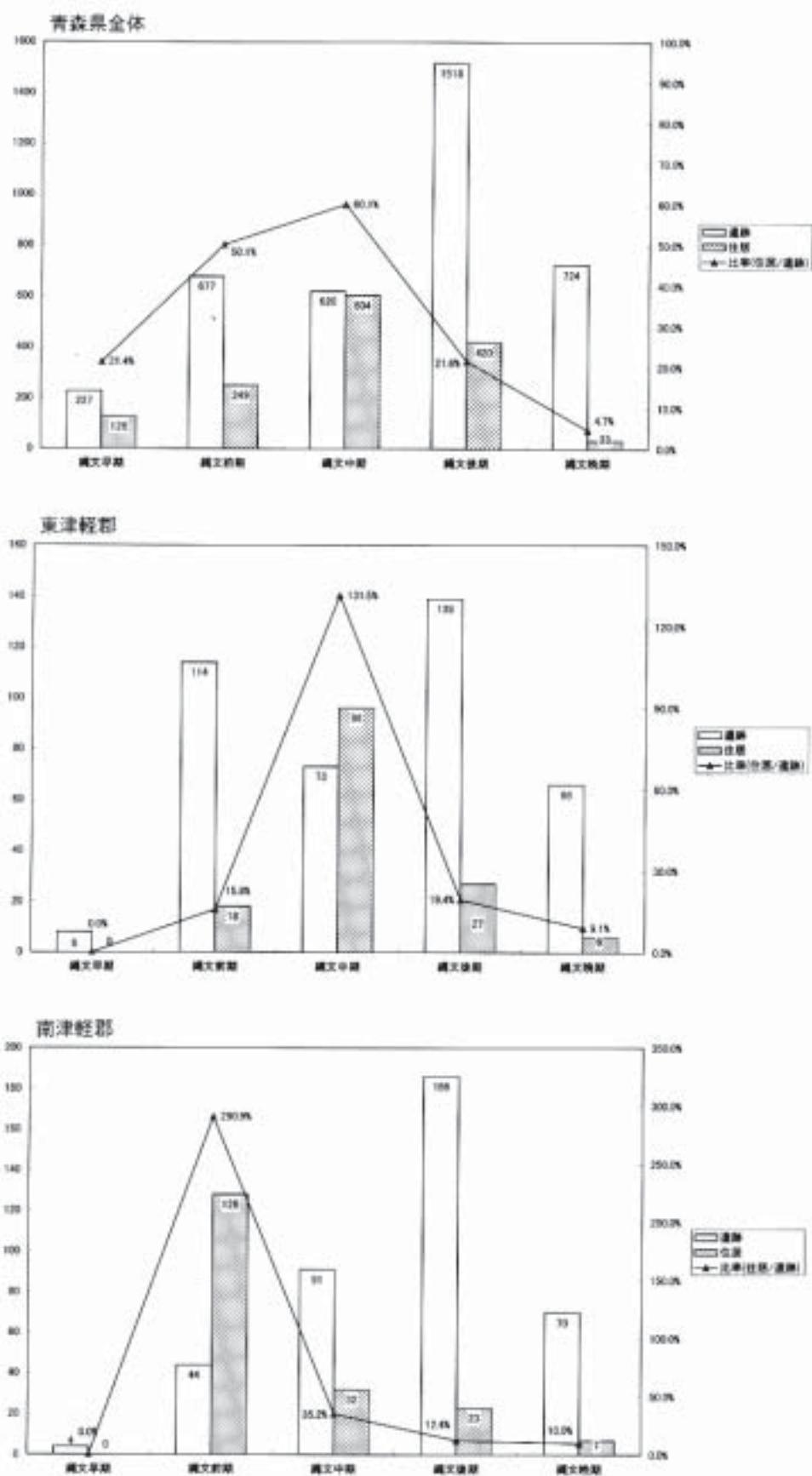
以上のような特徴を挙げると、

青森県内において、縄文時代の遺跡が65%、平安時代の遺跡が20%を占める。

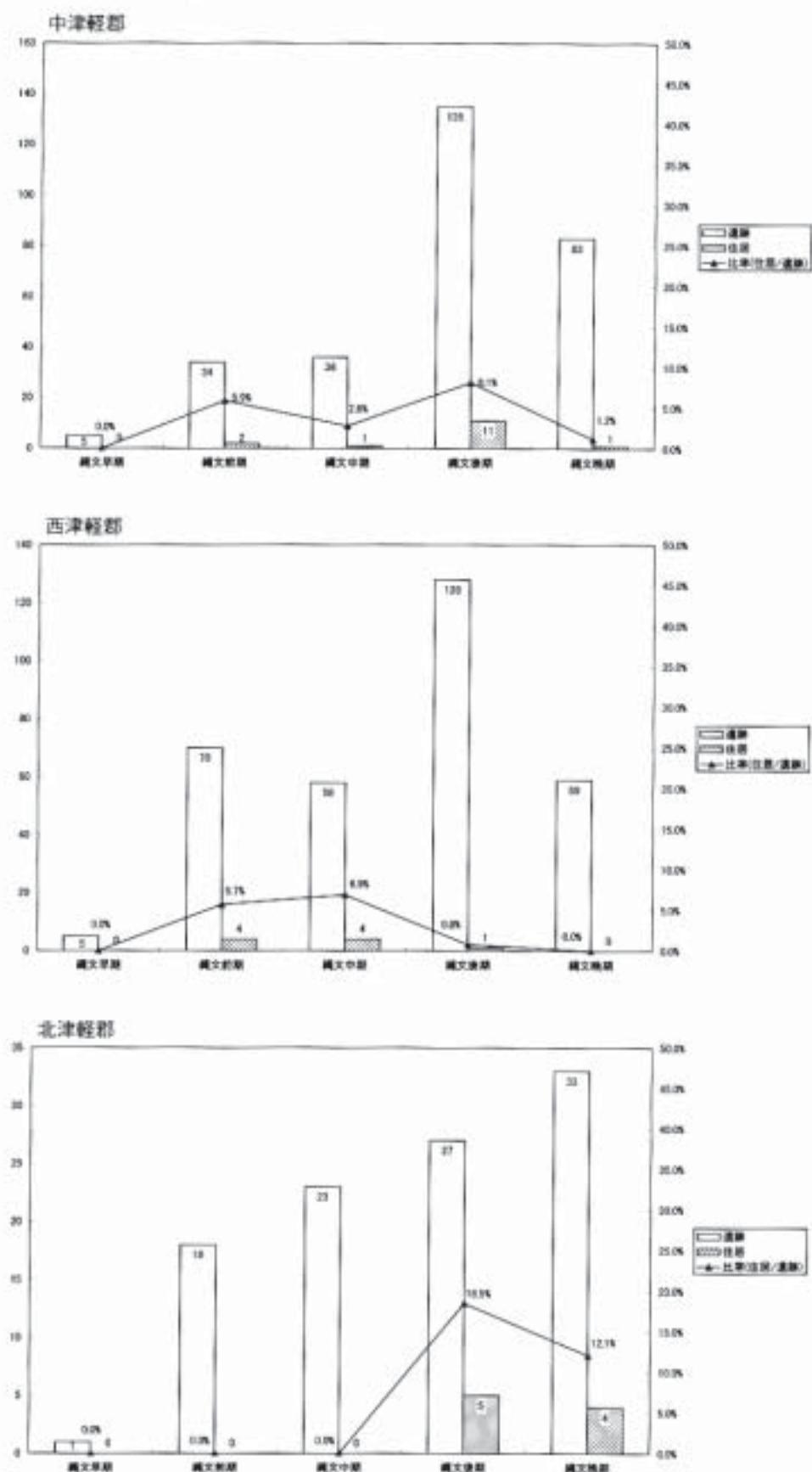
縄文時代における遺跡数においては、早期から前期にかけて増加し、中期で減少、後期に再び増加し、晩期にまた減少するという傾向がみられ、縄文後期が30%以上と最も多く、以下、前期、晩期、中期、早期、草創期の順で減少する。また、北津軽郡を除くいずれの地域においても後期でピークがみられる。早期に関しては上北郡、三戸郡の太平洋側に多く分布し、地域によって様相が異なる時期もある。

縄文時代の住居跡数においては、早期から中期にかけて増加し、後期から晩期へ向けて減少するという傾向がみられ、中期が42.2%と最も多く、以下、後期、前期、早期、晩期の順に減少し、必ずしも遺跡数と比例するものではない。前期に関しては南津軽郡が突出し、地域によって様相が異なる時期もある。

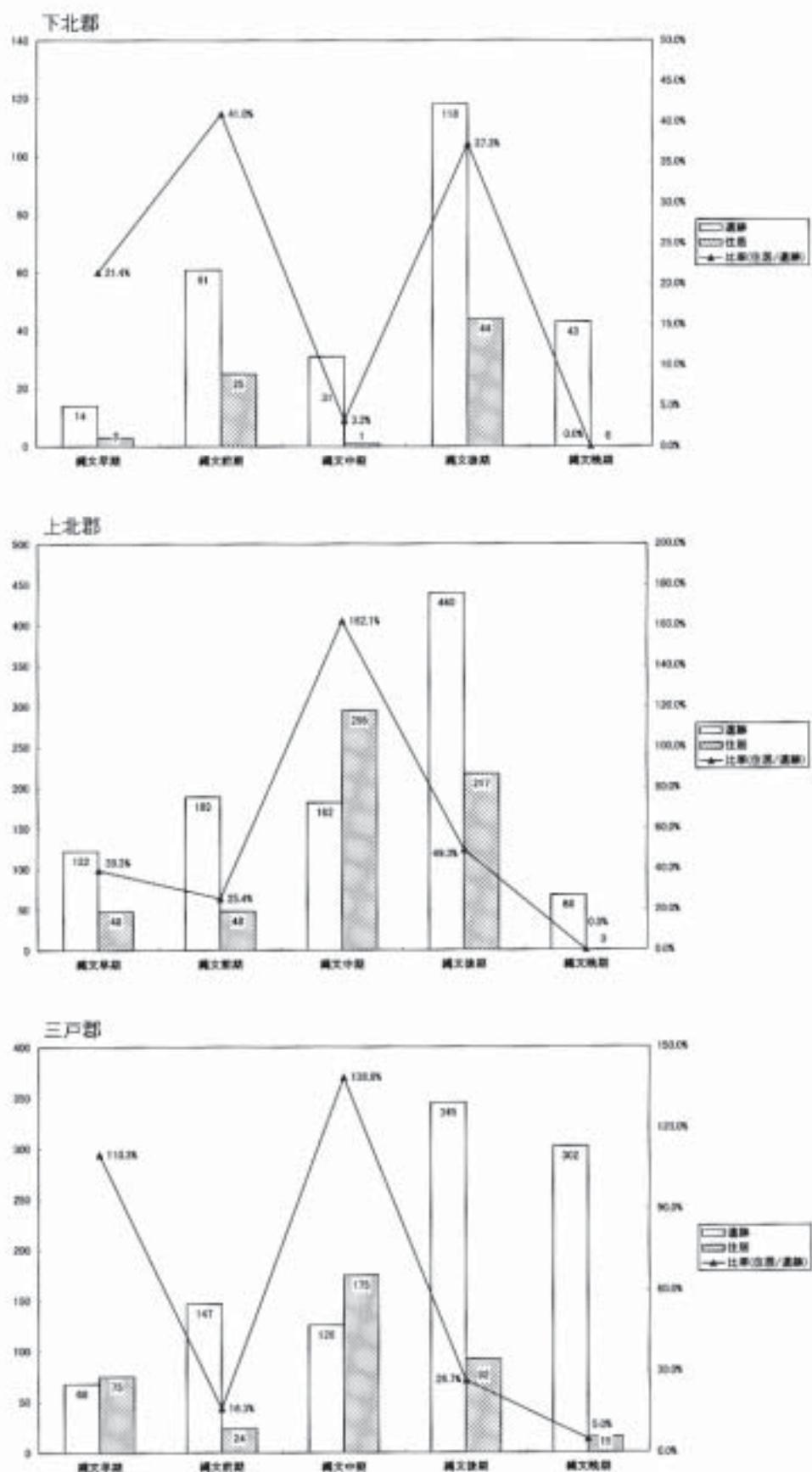
なお、遺跡数と住居跡数は、開発内容やその前提となっている立地条件、すでに開発された地区や現在の植生などによる環境、発掘調査の規模、住居の構造および耐久性などの様々な要件によって異なるため、結果をそのまま受け止めることはできない。



第38図 地域別にみた遺跡数および住居跡数の推移(1)



第39図 地域別にみた遺跡数および住居跡数の推移(2)



第40図 地域別にみた遺跡数および住居跡数の推移(3)



市町村番号及び名称

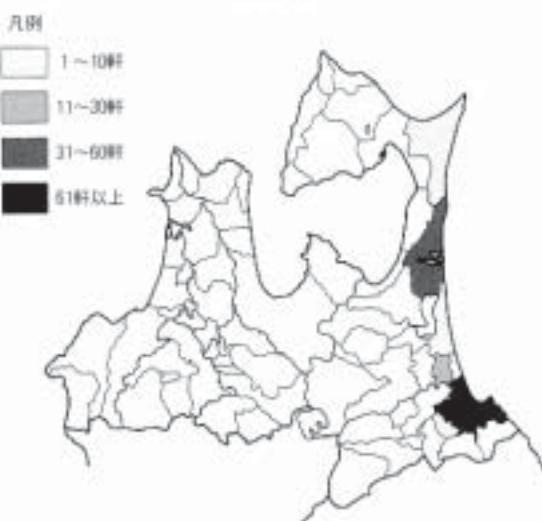
01 青森市	02 五所川原市	03 弘前市	04 田舎館村	05 三戸村
東津軽郡			西高間村	北上郡
			中小石野村	黒石村
			田代村	南陽村
西津軽郡			大門村	大庭村
			大庭村	河内村
中津軽郡			大庭村	子上村
南津軽郡			大庭村	
			大庭村	
北津軽郡				
上北郡				
下北郡				
三戸郡				

なお、本文の地図割りには、便宜上、青森市を東津軽郡、弘前市を中津軽郡、八戸市を三戸郡、黒石市を南津軽郡、五所川原市を北津軽郡、十和田市および三沢市を上北郡、むつ市を下北郡に含め記載している。

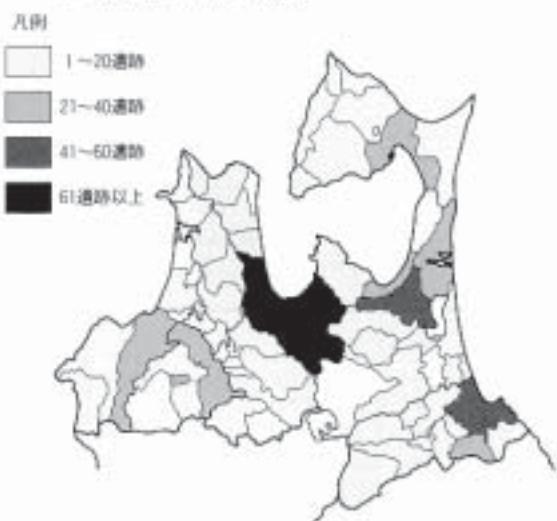
縄文早期における遺跡数



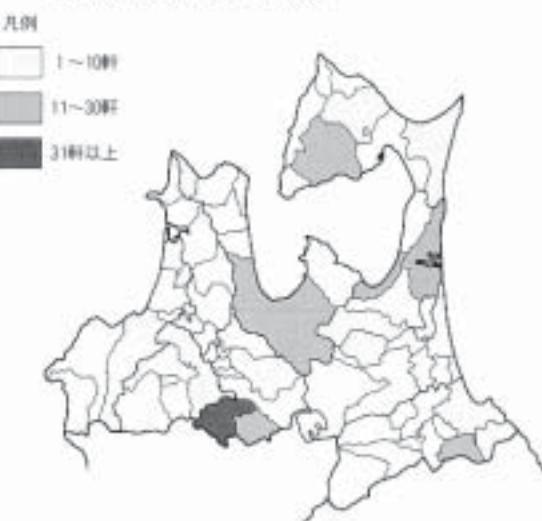
縄文早期における住居跡数



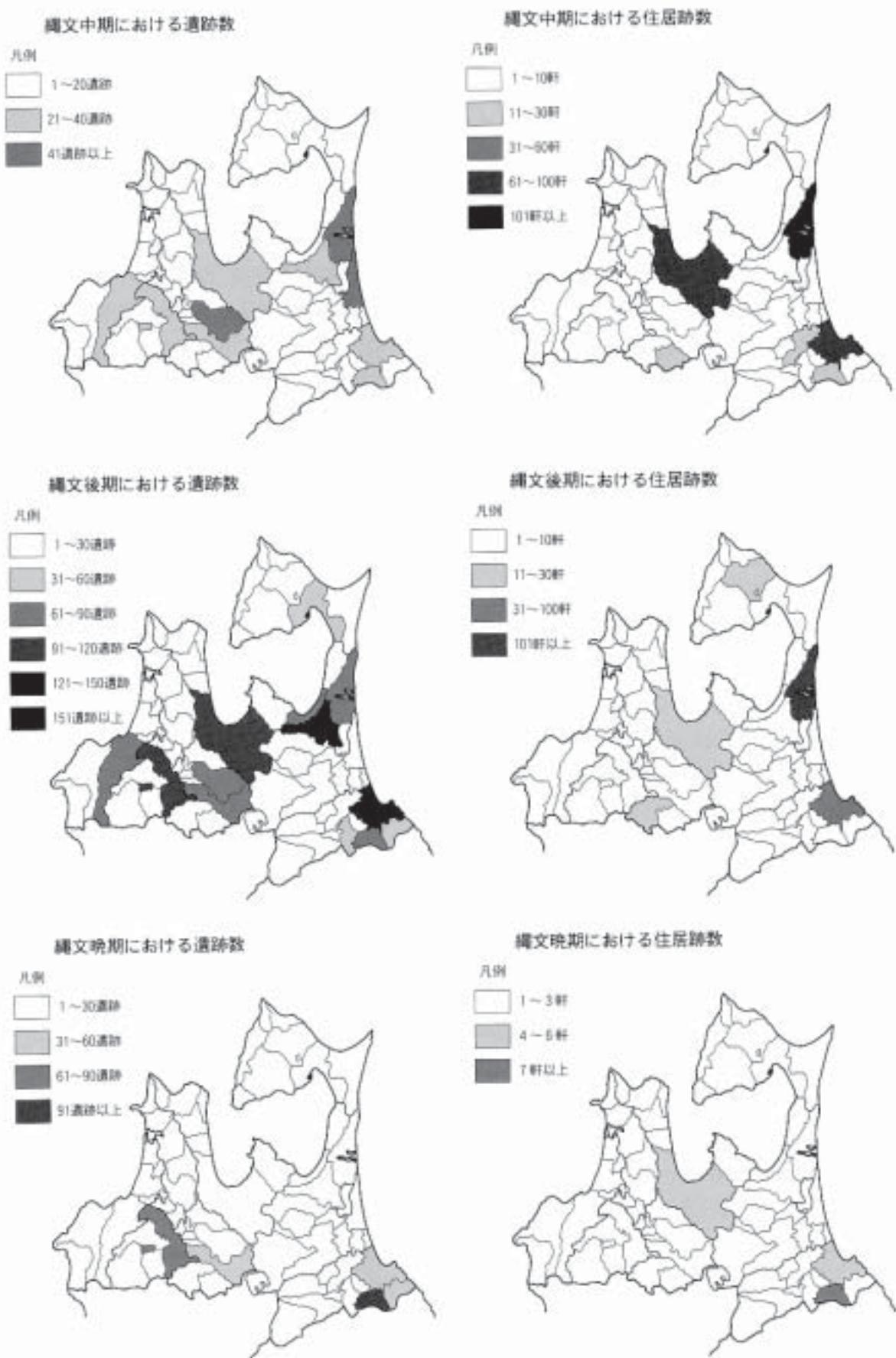
縄文前期における遺跡数



縄文前期における住居跡数



第41図 時期別にみた遺跡数と住居跡数の分布(1)



第42図 時期別にみた遺跡数と住居跡数の分布(2)

3. 資料の解釈

これまでみてきた遺跡数と住居跡数の時期的な偏差の背景には、集落の定住性や季節性などが含まれる継続性の問題、集落の規模や人口、性格などが起因しているものと考えられる。そこで、青森県を中心とした東北地方北部における集落の変遷を早期から通観し、後期の環状列石構築期の社会的な様相について考えてみたい。

早期については、近年、北海道函館市中野B遺跡で大規模な集落跡が発見され、全国的に注目されるようになり、北海道および東北地方北部の初期定住化の様相が明らかとなってきた（田中・富永 1998。）岡田康博氏は、遅くとも早期中葉には定住生活が営まれ、拠点集落と考えられる大型の集落が出現すると指摘しており、定住に伴う現象の一つとして大型住居の存在に注目している。また、集落の立地についても海浜部の段丘上に多く分布し比較的大規模な集落ほどその傾向は強いとしている（岡田 1998。）早期の住居跡については、中村哲也・坂本真弓の両氏によっても集成されており（中村・坂本 1998。）その一覧表をみると、八戸市長七谷地遺跡、売場遺跡、赤御堂遺跡、六ヶ所村表館（1）遺跡、新納屋遺跡、下田町中野平遺跡、福地村西張（2）遺跡などで、いずれも太平洋側の海浜部に立地していることがわかる。それが結果として上北郡・三戸郡などの地域において特に発展していることが第40・41図からも読み取ることができる。

前期については、円筒土器文化が東北地方北部から北海道南部にかけて前期中葉に成立する。小林克氏は、最温暖期に向かう早期から前期には「食糧貯蔵型社会」が成立するとし、前期や中期から始まる貯蔵穴を持つ遺跡が、海浜部だけではなく、内陸部にまで拠点的に営まれるようになったと指摘している（小林 1997a。）海浜部の遺跡とは、前記の早期にみられる太平洋側に分布する遺跡が該当し、内陸部の遺跡には碇ヶ関村大面遺跡が代表される。第38図では、県平均で住居数が遺跡数の50%であるのに対し、内陸部の南津軽郡では290%という極めて高い数値となっている。この地域の集落規模の大きさを物語っている。

中期については、関東中部地方においても住居跡数が著しく多く（今村 1997。）人口の増加やそれに伴う大規模、集落拠点集落の定着化が一般的に認められつつある。その最も顕著なのが、青森市三内丸山遺跡の存在である。岡田氏は、拠点集落を三内丸山遺跡を例に、竪穴住居、大型住居、墓、捨て場、盛土遺構、大型掘立柱建造物、貯蔵穴、粘土採掘穴、道路などの施設によって構成される集落とし、前期と比べると集落を構成する施設の種類は増加、大規模かつ長期間継続するものとしている。小林氏は、墓制の相違から円筒土器文化圏において拠点集落と衛星的集落に支えられていると指摘している（小林 1997b。）前者には三内丸山遺跡、天間林村二ツ森貝塚、後者には青森市桜峯（1）遺跡、深浦町津山遺跡などが該当するものと考えられる。第38図～40図では、東津軽郡、上北郡、三戸郡の地域において、遺跡数の減少に対し、住居跡数が増加する傾向が顕著にみられる。つまり、一つの遺跡に対する住居跡の軒数が増えることになるので、これらの地域では集落（あるいは集団、共同体）の規模が大きくなったといえる。これは、岡田氏の説を裏付ける結果となる。その他の地域については、発掘件数の多少による偏りや、地形的なものも考慮に入れて検討すべきであろう。現段階では、青森県全体の和を総じたものとしては、それが認められるが、やはり地域によって異なるものと考えられる。特に内陸部である中津軽郡や南津軽郡について、様々な角度から注意を払っていかなければならない。ちなみに、中期においては、県平均で住居跡数が遺跡数の60.1%を占めており、住居数で最も多い上北郡では162.1%、次いで三戸郡で138.9%、東津軽郡で131.5%となっている。

後期は、その前葉に本遺跡の環状列石が構築された時期である。内山純蔵氏は、平成10年10月に開催された国際狩猟採集民会議青森シンポジウムの中で、遺物の相違、気候の変化などに注目し、中期の三内丸山遺跡を「狩猟からクリ、ヒ工農耕の時期」、小牧野遺跡を、三内丸山遺跡と比較して食料の獲得や調理など日常的な生活道具（遺物）が少なく、逆に祭祀的な遺物の種類の豊富さに注目し「狩猟採集の時期」、後期後半の八戸市風張遺跡や弥生時代前期の弘前市砂沢遺跡を「稻作の時期」と位置付ける傾聴すべき発言をしている。一般に農耕民と狩猟採集民とでは、労働生産性と土地生産性が農耕民の方が当然のごとく高く、生産性の客観的な指標とされるものに人口密度が挙げられる。縄文時代の人口は、小山修三氏が遺跡数から、今村啓爾氏が住居跡数からそれぞれ推定を行っている（小山 1984、今村 1997）。両者とも関東地方においては、縄文中期に急激な人口増加と後期に減少するという見解を示している。人口密度の算出については、様々な前提条件を必要とするが、遺跡数に対する住居の占める割合も条件の一つとして考えられる。第38～40図中の折れ線グラフをみた場合、青森県平均では、中期に増加し、後期に大幅に減少している。人口密度を相対的に考えると、中期が農耕民、後期が狩猟採集民の生産力に近くなるわけだから、内山氏の説も納得することができる。小山・及川氏は、後期の飛躍的な遺跡数の増加について、気候の寒冷化により大規模集落が崩壊し、柔軟性のある小型の集落となり、より広い地域を動き回るという環境変化に対応する戦略を生み出したのではないかと解釈している（小山・及川 1996）。岡田氏は、後期の集落がそれ以前の時期にはみられなかった尾根筋、谷などへ進出し、集落の小型化、拡散・分散する傾向を示すと指摘している。第38図においても、県平均で、中期よりも住居跡数が減少し遺跡数が増加する傾向がみられる。これについては、後期における大規模集落、拠点集落の減少と集落の小型化、拡散・分散化を理由として挙げることができる。

中期後半に出現した石棺墓や再葬土器棺墓、大型環状列石は後期初頭から前葉にかけて定着する。いずれの遺構も墓としての機能、あるいはそれと密接に関わるもので、この時期の象徴性を示すものである。石棺墓が検出された青森市山野峠遺跡、平賀町堀合遺跡、大型環状列石が検出された秋田県鹿角市万座・野中堂遺跡（大湯環状列石）、鷹巣町伊勢堂岱遺跡などには、いずれも縄文人の組織力を発揮するだけのそうした施設が存在し、そこにはそれを構築するだけの共同体が当然存在していたはずである。

しかし、それらの周辺からは、その建設に関わっていたはずの人々の集落跡は未だ発見されておらず、それどころか周辺地域内の集落を抱える遺跡と比べて標高の高い所や急な斜面など居住を考えるうえでは立地条件が不利な場所に、墓やそれに密接に関わる遺構が構築されていることが多い。そのような場所に立地する遺跡は、集落と墓が分離する、「集落外型埋葬地」として理解されるべきものであろう。事実、そのような場所から発見される土器棺墓などは、単独で出土し、周知の遺跡からだけではなく、土取工事や耕作時に偶然発見される場合も多い。後期における遺跡数の飛躍的な増加の背景には、集落の拡散・分散化に加えて、集落から墓が分離した分、独立した埋葬地の出現と、その定着が理由として考えられる。